水辺だより

新潟の水辺を考える会　'92.12②

いよいよ１２月に突入。年の瀬ともなれば宴会を泳ぐようにこなしていく方々もいらしゃるのでは。おちょこの酒を見ながら、大掃除のぞうきんバケツの水を見ながら水辺の会のことも、思い出してくださいな。

今年１年の活動を振返ってみると、活動計画にのっていた「カヌー＆芋煮会」、「三面川ウォッチング」、「恒例の会員発表会」が実行にうつせませんで、事務局の息切れが若干感じられる結果となりました。すみません。

新潟の水辺９９選は６月から募集中ですが、集まっているのが少数ですので来年も引き続きます。

来年の計画については、総会で話しあって決めますので、ぜひ参加してください。

（総会＆忘年会のお知らせは後頁参照）

今年('93年)の活動一覧

（）は水辺の会以外の催し

２月	ヨセミテ公園の環境教育レポート
３月	どんち池・佐潟ウォッチング
４月	長野県水辺環境保全研究会シンポジウム
５月	（生活環境クラブツキノワグマシンポ）
６月	阿賀野川河口付近　ウォッチング
７月	自然環境復元シンポジウム
８月	（水郷水都全国会議多摩大会）
９月	近くて遠くて近いアジア　例会
１０月	（水際フレンドシップ会議　福岡）
１１月	甦れ水辺の野生　例会
１２月	総会＆忘年会

今年、シンポや勉強会を通じてできた人の輪が、来年は大きく花開く年にしましょう。

1993年 新潟の水辺を考える会 総会＆大忘年会のお知らせ

とうとう９３年も押し迫ってまいりました。今年一年、それぞれいろいろなことがあったかと思いますが、今年の思い出話や来年の期待話などに、みんなで花を咲かせようではありませんか。

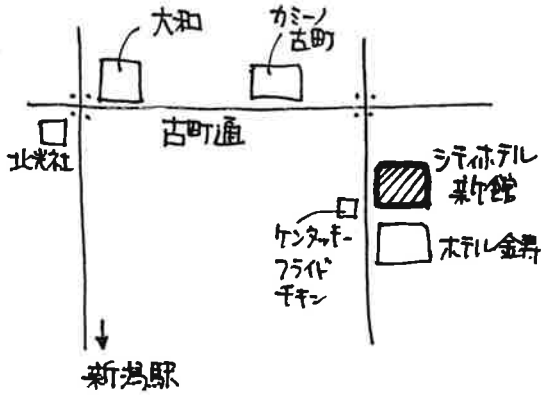
というわけで、以下の様に忘年会と総会を設定しました。総会は20分位と考えています。ふだん会に余り出られない方も、気にせずにご出席下さいませ。多くの方のご参加をお待ちしております。

会場への連絡のため、同封の葉書に出欠をご記入の上、１２月１０日（金）必着で事務局までご返送下さい。よろしくお願いいたします。

日時：１２月２２日（水）　19:00〜21:30頃

場所：「桃林」新潟シティホテル新館３Ｆ　025-229-5575
新潟市古町通8-1430

会費：５，０００円



甦れ水辺の野生　勉強会がありました

11月27日に行われた久しぶりの水辺の会の催しは参加人数は少なかったものの大変おもしろかったので、残念ながら来られなかった方のため内容を紹介します。

関川村でカジカ養殖に取り組むの松田さんのお話は先号にも掲載しました。スライドでカジカってやつの顔を初めて見た時には、私の脳から「食べたらおいしいらしいぞ。」の信号が送られていたのですが、お話を聞き終わって「こいつも大変なんだなあ」と生き物への親しみが生れていました。

食糧としてのカジカ養殖の面だけでなく、河川で生きるカジカの生態や、カジカの生活環境と人間の関わりにも話が及びました。

養殖ものだけでは孵化率が悪いので野生のカジカを必要としていること、エサのミジンコを大量に用意しなければならないこと、配合飼料とミジンコの割合でカジカの生育に差がみられることなど知らないことがたくさんありました。

来年はカジカ養殖場を見学して、関川村で渓流釣りをやってみるなんて企画はどうでしょうね。

シベリア自然探訪に行ってきた井上さんのお話とスライドは目を見張るものがありました。ゼロ戦型飛行機（旧式小型複葉機）から見降ろした大地は、川が自由気ままにくねった跡を湿原や草原や針葉樹林などの植生が追いかけて岡本太郎もまっさおの奇妙な模様を描いているようでした。人跡未踏の地が日本では信じられないスケールで延々と続いているらしいのです。

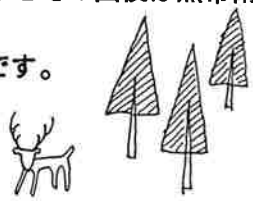
大河レナ川水系の源流、マヤ川を舞台に、釣りや自然探索をしながら日々を過されたとのこと。生き物や景観のスライドにこちらはわくわくしていました。

外国人向けにキャンプを経営しているピーターさん一家は、ムース（ヘラジカ）やクロテンの狩猟や野草の採取をはじめ、シベリアの自然の恵みを巧みに使って暮していることがうかがえました。なんと地面を堀り進むと天然の冷蔵庫になっていて、ムースの肉は井戸に深く吊り下げるようにして保存しているのです。

しかし、水がエキノコックスに汚染されている可能性があり、なま水が飲めないというのが怖いですね。（それじゃぁシベリアから北海道に流れつく流氷をオンザロックにするのは危険？）

ロシアは核投棄などに象徴されるように体制の崩壊による混乱で、自然環境保全などと言ってられない状況なのでしょうが、井上さんが見てきたような森林がなくならないようにしてほしいですね。タイガの森林を伐採するとその回復は熱帯雨林の復元より難しいといわれています。

井上さんは来年もまたシベリア行きを計画しているそうです。



かわぐち 文.え.

水辺のリレーエッセイ

先月から始まったコーナーです。会員の方に一筆書いていただいています。
内容は「水」に関することなら何でもＯＫで、枚数、字数も自由です。
最初に登場されるのは、長谷川一浩さんです。事務局内ではカヌーイストの長谷川さんで通っています。

第二話　「水のはなし」　　長谷川　一浩

最近暇を持て余して、ついつい図書館に籠って本の虫になっています。そこで、本から引っ張ってきた話をいくつか、ご紹介して、お茶を濁そうと思います。高校の化学の教科書みたいですが、お許し下さい。
さて、水は私たちの周りにありふれています、生命をかたち造るために欠かせないものです。
そして、液体の水が地表をおおっているのは地球だけのようです。氷の形でなら火星や木星の衛星などに、海王星,天王星には高圧の水または氷のマントルとして存在するようです。また、金星には水蒸気としてあります。

ありふれてはいますが、本当に奇妙な物質です。

密度は４℃で最も大きく、氷の方が軽い。もし、氷の方が重かったら、沈んだ氷はなかなか溶けず、地球全体が凍ってしまうのではないでしょうか。凍るときに体積が約１割増加しますが、こんな物質は他にはゲルマニュウムとビスマスだけです。

およそどんな物質でも溶かし、相手によって酸としても、塩基としても働く。
蒸発熱、融解熱、熱容量、熱伝導率も普通の液体の中で最も大きいものです。
つまり、熱しにくく冷めにくい、温度を一定に保つ性質が最も強い物質です。エチルアルコールなどは鍋にいれてコンロにかけたとき、水より３倍早く温度が上がってしまいます。お酒を飲むとつい威勢がよくなってエキサイトしてしまうのはこのせいです（うそですもちろん）。ともあれ、地球の環境の変化を押え、生命体の温度の変化を最小限に押えることになります。

地球表面の温度を一定に保つ為には大気の温室効果が大きく効いています。そして、水の方が二酸化炭素よりも強力な作用をしています。主要な役割をしていない二酸化炭素の割合が少し変わるだけで大きな変化がおこってしまうわけですから、地球の環境のバランスは本当に微妙なものです。

表面張力が大きいことも重要です。小さかったら、毛細管現象がおこらず、高い木は水を吸い上げることができなくなり、周り中草ばかり。

この異常な性質の殆どは、水同士が弱い力で結び付いていることによっているよう

です。
水はH-O-Hで表されますが、隣同士の水分子の間で水素原子が共有される形になります。つまり、　H-O-H‥O-H のように表される水素結合で、水分子が緊密に結び合わされます。液体でありながら、殆ど結晶のような構造になります。液体のｼﾞｬﾝｸﾞﾙｼﾞﾑみたいなものです。この構造がなかったら、水はﾏｲﾅｽ100℃で凍り、ﾏｲﾅｽ80℃で沸騰するはずです。温泉に行ったときのあの臭いの元の硫化水素は、水の酸素を、周期律表で一つ下の硫黄に置き換えた物です。重い原子が入っていますから水よりも沸騰しにくいはずですが、ﾏｲﾅｽ60℃で沸騰してしまいます。

この水素結合は生物の中で重要な重要な働きをしています。たとえば、ＤＮＡでは，Ａ，Ｔ，Ｇ，Ｃで表される４種類の塩基が遺伝暗号を決めていますが、かならず、ＡとＴ、ＧとＣが対になって同じ遺伝子が複製されますが、水素結合がこの組合せを決めています。
また、水はそれに溶けているものを、カプセルのように包み込む性質があります。ナトリウムなどのイオンもそうですが、タンパク質などの生体を構成する高分子は水素結合と、水和によって構造と機能が保たれています。たとえば、タンパク質などを、インスタントコーヒーのようにフリーズドライをすると壊れてしまい、水を加えても元に戻らないことがよくあります。このとき、糖を入れておくとこれが水の代わりをして、乾燥状態でも構造を保って破壊を防ぐ作用があります。

水は奇跡の物質です。上善如(若)水　（老酒）とは、おそらく御本人が意図した以上に当たっている言葉です。　ところで、Ｃ．Ｗ．ニコルさんが書いていましたが、ウエールズ語に生命の水（Uaba Usage ? ｽﾍﾟﾙに自信なし）との言葉があって、これはいわずと知れたウイスキーのこと。秋の夜長は、ひとつじっくりとこの水と親しむことに致しましょう。そういえば、アルコールは、CH_3CH_2-OH、水の仲間ですね。

次回は長谷川恵美子さんにお願いします。
指名がなくてもひとこと言いたい、書きたいというかたは、ぜひ　ご連絡ください。

～インフォメーション～

①水ライター小船井さんが書く新潟の水べ

新潟総合文化批評誌　月刊「風だるま」に会員の小船井さんが連載しているコーナーがあります。新潟の水辺を自分の足（チャリンコ）で駆けめぐり、想い、そして提案していく姿勢はわたくしたちも触発されるものがあります。

「風だるま」をご存じではない方はぜひ一度、読んでみてください。

②長編記録映画　『あらかわ』　の紹介

自然の中で調和して生きるってどういうことなのか、山を守るってどういうことなのか考えるきっかけとなる映画だとおもいます。水郷水都多摩大会でフィルムのラッシュを見ました。（川口）

③来春に長野の水辺環境保全研究会との交流会を計画中です。

●解説

1992年、11月。荒川上流にある滝沢ダムの地元合意が成立した。23年の歳月を経て、最後の反対同盟会が妥結したのだ。キャメラは、ダムを誘致した山村を起点として、源流から東京湾までの水系169キロに及ぶ荒川の水路を辿りながら、現在的な川の様相と水問題を、克明にルポルタージュしていく。そこには、自然と生きた山間の人々や、農民、漁民の生活が破壊されていく現実とともに、なおも肥れ上がろうとする下流の都市がある。

今、世界は、近代化がもたらした功罪に気付き、バランスを失った社会の軌道修正が行われようとしている。その中で、私たち自身が、川をはじめとした自然にどう向き合っていくべきなのか、その答えを求めて、キャメラは、山や海に生きる男たちの肉声をフィルムに焼きつけていく。

●すいせんの言葉　　東　陽一（映画監督）

人間は自然に手を加えなければ生きられない存在だが、この映画はそれを批判するわけではなく、その節度を暗示する。ダム建設をめぐる現実の利害の外で、荒川源流近くに生きる人物と河口の海に生きる人物とが、偶然のように同じ一点、〈山〉について語る言葉が、その意味で感動的だ。美しい水の映像と加古隆の音楽がその主題を鮮明にしている。

長篇記録映画・あらかわ・二九九三年シグロ作品

●監督メッセージ

川と共に生きていく、と言うことをもう一度自らに問い返してみると、実に多くの事が見えてきました。川が流れ下っていく流路には山があり農地があり海があります。そして、川が管理、施設化される以前の世界では、水の防人として、仙人と農民、漁師がいました。しかし、私たちが辿った川の流域では、その防人たちが近代化とともに途絶えようとしています。

水の防人を失っていく現在、川と共に生きていかなければならない私たちが、未来へ何を継承させていくのか、その問いの意味は意外に深いと言えます。かつて、アメリカインディアンのホピ族は、「今ここに存在している大地は未来からの借物である。だから我々はそれを大事に扱い未来へ返していかなければならない。」と言いました。

では、現代の私たちは、何を未来へ繋ごうとしているのでしょうか。

●すいせんの言葉　木原啓吉（千葉大学教授）

荒川源流部の山村の農民、中流部の都市住民、河口にひろがる東京湾の漁師たち。上流から下流まで、ひとつの川をとりあげて、水と住民の暮らしの関係を、これほどまでに包括的かつリアルに記録した映画があるだろうか。1993年の夏、第9回水郷水都全国会議に参加して、この映画を見た。水環境の保全について語る住民の的確な表現と淡々とした口調に私は深い感動を覚えた。

お問い合わせ

有限会社シグロ
〒171 東京都豊島区目白3-25-10
目白ハウスK102
TEL.03-5982-2080
FAX.03-5982-2085
プリント販売価格50万円

編集後記

12／22の　総会＆忘年会で　会いましょう。　（川口）